

15 世紀イギリスの手紙を読む

—パストン家の手紙に着目して—

平山直樹

1. はじめに

15 世紀イギリスの英語で書かれた手紙を収録した『パストン家書簡集』を読むと、現代と異なる言語的特徴だけでなく、当時の人々の日常生活や家族のあり方なども知ることができる。本稿では、手紙の構成、キリスト教の聖人の名を使った挨拶、そして手紙に記された様々な内容などに着目し、実例を挙げながらその特徴を説明する。なお、15 世紀は英語史的には、英詩の父と呼ばれ、『カンタベリ物語』で有名なチョーサーの後の時代であり、イギリスの劇作家・詩人であるシェークスピアの前の時代である。

1.1 パストン家とは

まず、『パストン家書簡集』に収められている手紙を書いた家族であるパストン家について、パストン家の社会史的側面に詳しい社本（1999: 29-30）に基づき、概要を以下に示す。（図 1、および写真 1、2 も参照されたい。）

パストン家は、15 世紀イングランド、ノーフォーク州の富裕な名家であった。しかし最初は平凡な農夫であり、14 世紀の終わりごろはノリッジから約 50 キロ離れたパストンという村に 100 エーカー（約 404686m²）の所有地をもち、そこで農耕に励んでいた。農夫であったクレメント・パストンが借金をしながらも息子であるウィリアム・パストン 1 世をロンドンの法学院に送って、そこで法律を学ばせたことが転機となった。ウィリアムは勉学に励んで上級弁護士資格を獲得し、その後国立裁判所判事の職にまで上り詰め、パストンの村でたくさんの土地を購入して手に入れることにより領主権を得た。そして他の土地でも荘園を獲得するなどパストン家の財産を増やし、ついにジェントリーと呼ばれる身分になった。¹

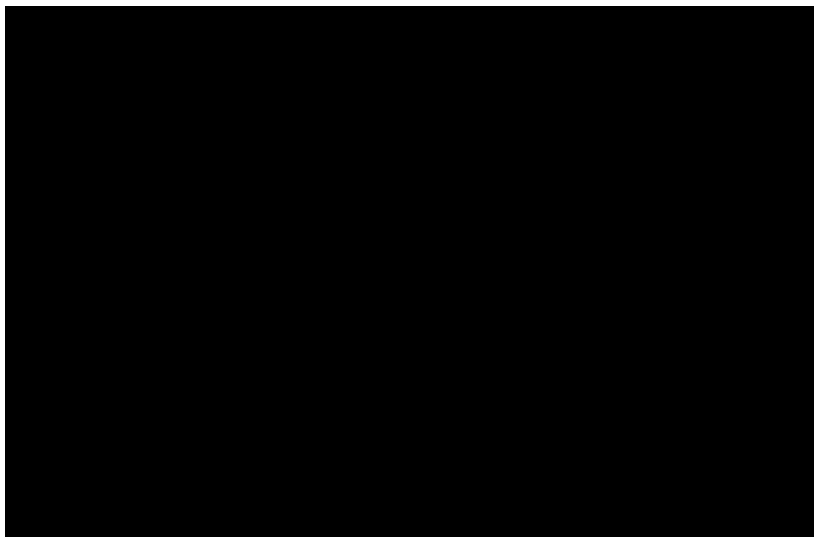


図1 パストン家関係地図：ノーフォーク州の北東の海岸沿いにパストンという村がある。パストン家の始祖クレメント・パストンは、その土地の農夫であった。（社本時子、『中世イギリスに生きたパストン家の女性たち — 同家書簡集から』、創元社、1999年、7頁より転載）

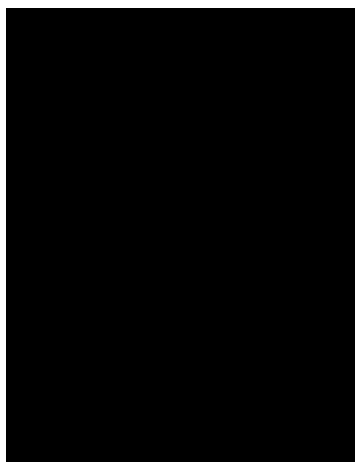
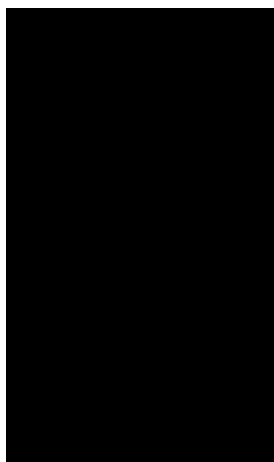


写真1、写真2 パストン家のかつての住居：ノーフォーク州の州都ノリッジのエルムヒルの通りには、それらの一部が現在も残されている。（社本時子、『中世イギリスに生きたパストン家の女性たち — 同家書簡集から』、創元社、1999年、12頁（写真1）、13頁（写真2）より転載）

1.2 『パストン家書簡集』とは

『パストン家書簡集』とは、先ほどのウィリアム・パストン1世を第1世代とする4世代にわたり家族間で交わされた私的な手紙や、パストン家宛に記された手紙類を集めたものである（図2参照）。

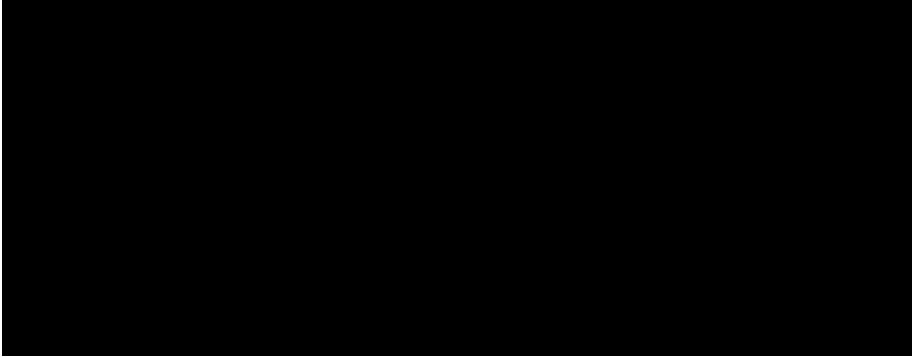


図2 パストン家家系図 (Davis I, pp. xl-lxxiv に基づき作成)

イギリスでは1066年の「ノルマン人の征服」以来、読み書きできる上層の人々は通常フランス語やラテン語を使用しており、手紙もそれらの言葉で書かれていた。² 英語は1362年に正式に公用語とされ、1450年ごろまでに一般的になった。³ よって、この書簡集はイギリスにおいて自国の言語である英語で手紙が書かれ始めた15世紀の貴重な言語資料であると言える。

当時、識字率も高くなく（17世紀でも特に女性は8割以上が文盲⁴）、現代のような郵便制度もなかったため、手紙を書くこと、送ることには苦勞を強いられる時代であった。⁵ しかし、紙に関しては当時生産が拡大して普及しつつあったため、パストン家のような紳士階級は手紙を書くことができた。⁶ 特に土地の所有権に関する激しい争いをしていたパストン家では、手紙で領地の管理についても家族間で指示したり報告したりしていた。そのため、ジョン・パストン1世は一家の所有地についての法的対応の手段として、手紙を残しておくことを心がけていた。それが妻や息子に受け継がれ、多くの手紙が残ることとなった。⁷

手紙には、このような法的な内容に加え、家庭内の出来事、生活習慣、商

業の習慣、当時の国家の動き、農村社会の情勢なども書かれていたため、『パストン家書簡集』は、社会史の観点からも15世紀のイギリスを知ることができる第1級の資料となっている。⁸

2. 典型的な構成

ここでは、第1世代のウィリアム・パストン1世の妻であるアグネス・パストンの手紙を軸にして、典型的な手紙の構成を順に説明する。まず始めの挨拶、次に手紙に書かれる内容、最後に終わりの挨拶を見る。

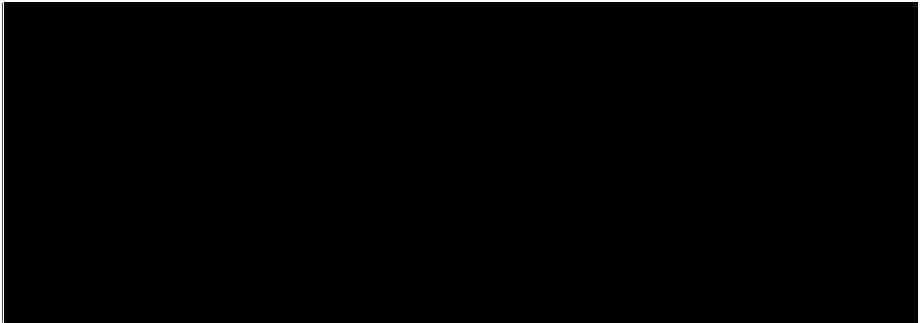


写真3 妻アグネス・パストンから夫ウィリアム・パストン1世への手紙 (By permission of the British Library, © British Library Board (Add MS 43488, f. 4))

Probably 1440, 20 April

(1) Dere housbond, I recomaunde me to yow, &c. Blyssyd be God, (2A) I sende yow gode tydynggys of þe comyng and þe brynggyn hoom of þe gentylwomman þat ye wetyn of fro Redham þis same nyght, acordyng to poyntmen þat ye made þer-for yowre-self. And as for þe furste aqweyntaunce be-twhen John Paston and þe seyde gentylwomman, she made hym gentil chere in gyntyl wyse and seyde he was verrayly yowre son. And so I hope þer shal nede no gret treté be-twyxe hym.

(2B) þe parson of Stocton toold me yif ye wolde byin here a goune, here moder wolde yeue ther-to a godely furre. þe goune nedyth for to be had, and of coloure it wolde be a godely blew or ellys a bryghte sanggweyn. (2C) I prey yow do byen for me ij pypys of gold. (2D) Yowre stewes do weel.

(3A) The Holy Trinité have yow in gouernaunce. (3B) Wretyn at Paston in hast be Wednesday next after Deus qui errantibus, for defaute of a good secretarye, &c.

Yowres, AGNES PASTON

(Davis No. 13, ll. 1-15)⁹ (下線、記号、注解等は筆者による。以下同様。)

(おそらく) 1440年4月20日

(1) 愛する貴方に、心からの御挨拶を申し上げます。

神様の祝福のありますように。(2A) 素晴らしいお嬢さんを我が家に迎えた朗報をお知らせします。リーダムにお住まいのそのお嬢さんは貴方も御存知の方で、貴方が整えられた手はず通りに、当夜訪問なさいました。ジョン・パストンとそのお嬢さんが初めて顔を合わされた時のことを報告いたしますと、彼女は生まれの良い方らしく、しとやかに明るく振舞われまして、ジョン様はまさにお父様の息子さんでいらっしゃるねと挨拶なさいました。そのような具合ですので、私は二人の間にむつかしい取り決めの必要のないことを願っています。

(2B) ストックトンの牧師さんは、貴方が彼女にガウンを買っておあげになれば、先方のお母様はそれによく似合うような毛皮をつけて下さるだろうとおっしゃっていました。ガウンは持っていなければならない品物ですし、色は上品な青色か、輝くような深紅色になさいませ。(2C) 黄金色の糸巻きを二本、私にお買い求めくださるようお願いいたします。(2D) 貴方の養魚池は大丈夫でございます。(3A) 三位一体の神様が貴方をお護り下さいますように。(3B) 良い秘書がいませんので、…とりいそぎパストンにいたしました。

アグネスより

(社本 51-52) (括弧内の訳の追加は筆者による。)

掲載した手紙(写真3、枠内の英語テキスト、および日本語訳)は、第1世代のアグネス・パストンが、ロンドンに滞在中の夫ウィリアム・パストン1世に宛てたものであり、息子のジョン・パストン1世の理想の花嫁が決まりそうなことを伝えている。¹⁰

以下では、枠内で下線を引いた部分を再度引用して説明する。まず、(1)は始めの挨拶で、通常は大体決まった言い回しがある。この手紙では短い文であるが、相手との社会的な関係や手紙の内容などによって、より丁寧

するために長くなることもある。綴りのバリエーションが多いのは、キャクストンが印刷術をイングランドに持ち込む以前であった当時の特徴でもある。¹¹ recommend はここでは相手に覚えておいてもらうために自分自身を薦めるという意味で、recommend [= commend] me to ... で「... にどうぞよろしく」という意味である。¹² なお、括弧内では現代英語綴りに直し、必要に応じて現代英語における概念をイコールで示した（以下同様）。

- (1) Dere housbond, I recomaunde me to yow, & c. (No. 13, l. 1)
(Dear husband, I recommend [= commend] me to you, etc.)
愛する貴方に、心からの御挨拶を申し上げます。（社本 51）

(2) は手紙の内容部分である。『バストン家書簡集』ではここで土地の所有権の争いについて報告がなされることが多いが、その一方で、生活に密着した報告や頼みごとなどもなされる。この手紙は後者の場合であり、まず (2A) で息子の花嫁となる予定の女性がリーダムから来たという良い知らせを伝えている。次の (2B) では、牧師がその女性にガウンを作ってやることを提案したことが報告されている。また、それ以外のことも述べられており、(2C) では金糸の糸巻が 2 本要求され、(2D) では養魚池が大丈夫であることが述べられている。なお、本書簡集においては、お願いをする際に (2C) の下線で示した I pray you のような動詞 pray を使った表現がよく用いられる。

- (2A) I sende yow gode tydynggys of þe comyng and þe brynggyn hoom of þe gentylwomman þat ye wetyn of fro Redham þis same nyght, acordyng to poyntmen þat ye made þer-for yowre-self. (No. 13, ll. 1-4)
(I send you good tidings of the coming and the bringing home of the gentlewoman that you wit [= know] of from Reedham this same night, according to appointment that you made therefore [= for it] yourself.)
素晴らしいお嬢さんを我が家に迎えた朗報をお知らせします。リーダムにお住まいのそのお嬢さんは貴方も御存知の方で、貴方が整えられた手はず通りに、当夜訪問なさいました。（社本 51）

(2B) *Pe parson of Stocton toold me yif ye wolde byin here a goune, here moder wolde yeue ther-to a godely furre. (No. 13, ll. 8-9)*

(The parson of Stockton told me if you would buy her a gown, her mother would give thereto [= for it] a goodly fur.)

ストックトンの牧師さんは、貴方が彼女にガウンを買っておあげになれば、先方のお母様はそれによく似合うような毛皮をつけて下さるだろうとおっしゃっていました。(社本 52)

(2C) *I prey yow do byen for me ij pypys of gold. (No. 13, l. 11)*

(I pray you do buy for me 2 pipes of gold.)

黄金色の糸巻きを二本、私にお買い求めくださるようお願いします。(社本 52)

(2D) *Yowre stewes do weel. (No. 13, l. 11)*

(Your stews do well.)

貴方の養魚池は大丈夫でございます。(社本 52)

(3) は終わりの挨拶である。この個所ではキリスト教の神や聖人に触れて相手を祝福したり、聖人の名前によって日付を示したりすることが一般的であった。¹³ まず (3A) では神に対する祈りが述べられている。次に (3B) では書いた場所と日付が述べられている。さらに、パストン家が住んでいるパストンという場所では良い秘書がないので急いで書いたということも示されている。日付は *Deus qui errantibus* のすぐ後の水曜日と表されているが、Davis はこの手紙 (No. 13) に付されたの説明の中で、*Deus qui errantibus* とはイースターの後の 3 回目の日曜日に行う集団祈祷の始めの言葉であり、1440 年のイースターは 3 月 27 日であったことから、この手紙は 4 月 20 日に書かれたものであると推定している。このようなことから、当時キリスト教が人々に十分浸透していたことがわかる。

(3A) *The Holy Trinité have yow in gouernaunce. (No. 13, l. 12)*

(The Holy Trinity have you in governance.)

三位一体の神様が貴方をお護り下さいますように。(社本 52)

- (3B) Wretyn at Paston in hast þe Wednesday next after *Deus qui errantibus*, for defaute of a good secretarye, &c. (No. 13, ll. 12-14)

(Written at Paston in haste the Wednesday next after *Deus qui errantibus*, for default [= absence] of a good secretary, etc.)¹⁴

良い秘書がいませんので、(*Deus qui errantibus* のすぐ後の水曜日に) とりいそぎパストンにてしたためました。(社本 52) (括弧内の訳の追加は筆者による。)

2.1 始めの挨拶

まず、先ほどの手紙の (1) で示した挨拶の部分に着目する。挨拶文は慣習的な形式に従っているが、書き手と受け手の関係や手紙の内容などによってバリエーションがある。

(4) は、既に (1) で見た妻アグネス・パストンから夫ウィリアム・パストン 1 世に対しての手紙の冒頭にある簡単な挨拶である。(5) は第 2 世代の、妻マーガレット・パストンから夫ジョン・パストン 1 世に対するものであるが、こちらは言葉を尽くして文を長くすることで、丁寧な挨拶にしている。それに対して、夫であるジョン・パストン 1 世から妻であるマーガレット・パストンへの手紙では大半が (6) に下線で示したように *I recommend me to you* (「貴方に御挨拶申し上げます」と最初の文の一部が挨拶となり、それ以降は *letting you wit ...* (「...をお知らせいたします」とすぐに用件となる。

- (4) アグネス・パストン (第 1 世代・妻) ⇒ ウィリアム・パストン 1 世 (第 1 世代・夫)

Dere housbond, I recomaunde me to yow, &c. (No. 13, l. 1)

(Dear husband, I recommend [= commend] me to you, etc.)

愛する貴方に、心からの御挨拶を申し上げます。(社本 51)

- (5) マーガレット・パストン (第 2 世代・妻) ⇒ ジョン・パストン 1 世 (第 2 世代・夫)

Ryth reuerent and worscheful husband, I recomavnde me to yow, desyryng hertyly to here of yowre wyfare, ... (No. 125, ll. 1-2)

(Right reverent and worshipful husband, I recommend [=commend] me to you, desiring heartily to hear of your welfare, ...)

親愛なるわが夫に御挨拶申し上げ、ご無事の情報をお聞かせくださることを心より待ち望んでおります。(三川 17)

- (6) ジョン・パストン 1 世 (第 2 世代・夫) ⇒ マーガレット・パストン (第 2 世代・妻)

I recomaunde me vnto you, letyng you witte that your vnkyll John Berney is deed, whoos soule God haue mercy.... (No. 56, ll. 1-2)

(I recommend [= commend] me unto [= to] you, letting you wit [= know] that your uncle John Berney is dead, whose soul God have mercy....)

貴方に御挨拶申し上げます。貴方の叔父のジョン・バーニーが亡くなったことをお知らせいたします。神が彼の魂をお赦しになりますように。
(拙訳)

親子の場合も敬意を表すために長い挨拶になることがある。(7) では、父であるジョン・パストン 1 世の機嫌を損ねてしまった息子ジョン・パストン 2 世が丁寧に挨拶をしている。¹⁵ また、(8) では母親であるマーガレット・パストンに対して、息子のジョン・パストン 3 世が丁寧に敬意を表しながら挨拶をしている。¹⁶

- (7) ジョン・パストン 2 世 (第 3 世代・息子) ⇒ ジョン・パストン 1 世 (第 2 世代・父)

Ryght worschypful syre, jn the most lowly wyse I comaund me to yowre good faderhod, besechyng yow of yowre blyssyng. (No. 234, ll. 1-2)

(Right worshipful sir, in the most lowly way, I commend me to your good fatherhood, beseeching you of your blessing.)

誰よりも敬愛する、善良なる私が父上に、伏してご挨拶申し上げつつお便り申し上げ、祝福を希うものです。(三川 17)

- (8) ジョン・パストン3世(第3世代・息子) ⇒ マーガレット・パストン(第2世代・母)

Most worchepfull and my ryght specyall good modyr, as humbylly as I can I recomand me on-to yow, besechyng yow of youyr blyssyng. (No. 347, ll. 1-2)
(Most worshipful and my right special good mother, as humbly as I can, I recommend [= commend] me onto [= to] you, beseeching you of your blessing.)

誰よりも敬愛する、誰よりも善良なるわが母上に、心よりへりくだってお便り申し上げ、祝福を請い願うものです。(三川 17)

(9) は兄弟同士の場合で兄から弟の挨拶である。下線を引いた部分のように、簡単な挨拶で済ませることが多い。(10) は弟から兄への手紙であるが、こちらではさらに簡略化され、Sir と呼びかけるだけで、挨拶自体は省略されている。

- (9) ジョン・パストン2世(第3世代・兄) ⇒ ジョン・パストン3世(第3世代・弟)

Brother, I comand me to yow, letyng yow wete þat I sende yow a letter in a boxe by Corby, and a nother by Gulmyn the gonnere whyche I wote well is nat comen yit to yow. (No. 256, ll. 1-3)

(Brother, I commend me to you, letting you wit [= know] that I sent you a letter in a box by Corby, and another by Gulmyn the gunner [= gunsmith] which I wit [= know] well is [= has] not come yet to you.)

弟よ、貴方にご挨拶いたします。そして、私がコービーを使って箱に入れた手紙を1通送ったということをお知らせします。また、鉄砲鍛冶のガルミンを使ってもう1通送りましたが、それはまだ貴方のところに届いていないということを私はよく知っています。(拙訳)

- (10) ジョン・パストン3世(第3世代・弟) ⇒ ジョン・パストン2世(第3世代・兄)

Syr, plesyth yow to weet þat my modyr and I comonyd þis day wyth Freyr

Mowght to vndyrstand what hys seying shall be in the coort when he comyth vp to London, wheche is in þis wyse. (No. 327, ll. 1-3)

(Sir, please you to wit [= know] that my mother and I comoned [= talked] this day with Freyr Mought to understand what his saying shall be in the court when he comes up to London, which is in this way.)

貴方様、修道士モートがロンドンに来た時に法廷でどのように発言するつもりなのかを理解するために、本日、私の母と私が彼と話をしたということを知っておいてください。その内容は次のようなものです。

(拙訳)

最後は、社本によると「一目ぼれをしたらしい」マージャリー・ブルーズから、ジョン・パストン3世へのラブレターの書き出しである。¹⁷ 挨拶が長文であり、気持ちが伝わってくるように感じられる。

(11) マージャリー・ブルーズ (第3世代) ⇒ ジョン・パストン3世 (第3世代)

Ryght reuerent and wurschypfull and my ryght welebeloued Voluntyne, I recommande me vn-to yowe full hertely, desyring to here of yowr welefare, which I beseche Almyghty God long for to preserve vn-to hys plesure and 3owr hertys desyre. (No. 415, ll. 1-4)

(Right reverent and worshipful and my right well-beloved Valentine, I recommend [=commend] me unto you full heartily, desiring to hear of your welfare, which I beseech Almighty God long for to [= to]* preserve unto his pleasure and your heart's desire.) (*for to = to)

まことに敬虔で敬うべき、そしてとても愛しいヴァレンタイン様、真心から御挨拶申し上げ、貴方様の繁栄をお聞きしたいと思います。それについては全能の神が楽しみのため、そして貴方の心の望みのために維持しておきたいとお思になることを願っています。(拙訳)

2.2 内容(家庭内の報告、出来事の報告、土地所有に関しての報告、お願い、要求)

『パストン家書簡集』では、激しい土地の所有争いと並行して当時の生活を垣間見ることができる。ここで特徴的な一つの手紙を挙げる。もともとパストン家の所有であるグレシャムの荘園が、ジョン・パストン1世の留守中に、その荘園の所有を主張する他のものからの攻撃を受けており、妻のマーガレット・パストンがその荘園内の1つの家屋を守っている状況である。以下は、そのような状況において彼女がロンドンにいる夫ジョン・パストン1世へ送った手紙である。¹⁸

マーガレット・パストン(第2世代・妻) ⇒ ジョン・パストン1世(第2世代・夫)

(12) Ryt wurchipful hwsbond, I recomawnd me to zu and prey zu to gete som crosse bowis, and wyndacis to bynd þem wyth, and quarell, for zuw hwsis here ben so low þat þere may non man schete owt wyth no long bowe þow we hadde neuer so moche nede. I sopose ze xuld haue seche thynghis of Sere Jon Fastolf if ze wold send to hym. And also I wold ze xuld gete ij or iij schort pelle-axis to kepe wyth doris, and als many jakkys and ze may.

(中略)

(13) I pray zu þat ze wyl vowche-save to don bye for me j li. of almandis and j li. of sugyre, and þat ze wille do byen summe frese to maken of zuw childeris gwnys; ze xall haue best chepe and best choyse of Hayis wyf, as it is told me. And þat ze wyld bye a zerd of brode clothe of blac for an hode fore me of xliij d. or iij s. a zerd, for þer is nothere gode cloth nere god fryse in this twyn. As for þe childeris gwnys, and I haue cloth I xal do hem maken. The Trynyté haue zuw jn his keping and send zuw gode spede in alle zuw materis. (No. 130, ll. 1-6, ll. 25-32)

(12) まことに崇拜に値する貴方にご挨拶申し上げます。弩矢(クロス・ボウ)とそれを発射する装置および太矢を送って下さるようお願いいたします。この家屋は低すぎるので、長い矢は誰でも発射できません。これほど必要にせまられている時はありませんのに。貴方がお頼みになれば、サー・ジョン・ファストルフからこのような品を調達できると思います。それから扉を守るのに短い戦斧(ボウラックス)を二、三丁とできるだけ沢山の革の防着(ジャック)の入手をお願いします。

(中略)

(13) お願いがあります。アーモンド 1 ポンドと砂糖 1 ポンドを買い求めて下さい。子供たちのガウン用の服地もお願いします。ヘイの奥さんの店で買って下さい。一番安くて、一番良い品があると聞いています。私の頭巾用に、1 ヤードにつき 44 ペンスか 4 シリング程度の黒い色の広巾ラシャ地を買い求め下さいませ。この町には良い布地も、良い厚地のラシャ地も売っておりません。子供たちのガウンは品物が届けば私が縫うつもりです。三位一体の神が貴方をお守り下さいますように。そしてすべての用件を果たさせて下さいますように。(社本 93-94)

ここで、下線を引いた特徴的な部分を再度以下に抜き出した。彼女はロンドンにいるジョン・パストン 1 世に対して、(12) で武器を要求しながらも、(13) では生活用品を要求している。どちらもお願いをしているが、その際、(2C) でも触れたお願いをする際によく使われる動詞 *pray* が使われている。それぞれに下線を引いた。

(12) Ryt wurchipful hwsbond, I recomawnd me to zu and prey zu to gete som crosse bowis, and wyndacis to bynd þem wyth, and quarrel. (No. 130, ll. 1-2)
(Right worshipful husband, I recommend [=commend] me to you and pray you to get some crossbows, and windlass to bind them with, and quarrel.)
まことに崇拝に値する貴方にごあいさつ申し上げます。弩矢(クロス・ボウ)とそれを発射する装置および太矢を送って下さるようお願いいたします。(社本 93)

(13) I pray zu þat ze wyl vowche-save to don bye for me j li. of almandis and j li. of sugyre, and þat ze wille do byen summe frese to maken of zwr childeris gwnys. (No. 130, ll. 25-27)
(I pray you that you will vouchsafe to do buy for me 1 pound of almonds and 1 pound of sugar, and that you will do buy some frieze to make of your children's gowns.)

お願いがあります。アーモンド 1 ポンドと砂糖 1 ポンドを買い求めて

下さい。子供たちのガウン用の服地もお願いします。(社本 94)

また、その後グレシャムの土地は争っていた相手であるモーリンズ卿の手中に落ちてしまう。しかし、モーリンズ卿は法的権利を持ってはいなかった。(14) は色々な人がそこに入って権利を主張せよとアドバイスしているが自分にその気はないということを、ジョン・パストン 1 世がパストン家の代理人であるジェイムズ・グレシャムに対して述べているところである。当時 1 マルクは 3 分の 2 ポンドであったが、彼はその土地が元々の 50 マルク、つまり約 33.3 ポンドから 20 ポンドに満たない価値に下がっているからであると理由を述べている。¹⁹

(14) ジョン・パストン 1 世 (第 2 世代) ⇒ ジェイムズ・グレシャム (パストン家代理人)

Dyurse men of my freendis auyse me to entre in-to þe maner of Gresham by force of my writte of restitucion, whiche I wole not do by cause þe maner is so decayed by the Lord Moleyns ocupacion that where it was worth to me 1 marc. clerly by yeere I cowde not now make it worth xx li. (No. 39, ll. 62-66)

(Diverse men of my friends advise me to enter into the manor of Gresham by force of my writ of restitution, which I will not do because the manner is so decayed by the Lord Moleyns' occupation that where it was worth to me 50 marc clearly by year I could not now make it worth 20 pound.)

私の友達の色々な人が、回復令状の力により、グレシャムの荘園に入って権利を主張するようにと私に助言します。でも、そうはしません。なぜなら、その荘園はモーリンズ卿の保有によりとても荒れており、かつて私にとっては毎年 50 マルクの価値のあるものだったのに、今ではそれを 20 ポンドの価値にすることもできません。(拙訳)

また、この時代には、ランカスター家とヨーク家によるバラ戦争があったが、(15) は、その戦いの一つ、バーネットの戦いに参加した時の報告を、ジョン・パストン 2 世が母親であるマーガレットにしている部分である。²⁰

- (15) ジョン・パストン2世(第3世代・息子) ⇒ マーガレット・パストン(第2世代・母)

Moodre, I recomande me to yow, letyng yow wette þat, blyssed be God, my brother John is a lyffe and farethe well, and in no perell off dethe. Neuer the lesse he is hurte wyth an arow on hys ryght arme be-nethe þe elbow, and I haue sent hym a sorion whyche hathe dressid hym, and he tellythe me þat he trustythe þat he schall be all holl wyth-in ryght schort tyme. (No. 261, ll. 1-6)
(Mother, I recommend [= commend] me to you, letting you wit [= know] that, blessed by God, my brother John is alive and fares well, and in no peril of death. Nevertheless he is hurt with an arrow on his right arm beneath the elbow, and I have sent him a surgeon which has dressed him, and he tells me that he trusts that he shall be all whole within right short time.)

母上に謹んでご挨拶申し上げ、ご報告します。神の祝福に恵まれて、弟は生きて、元気でいて、死の危険はありません。ただし、右腕の肘の下に矢傷を負っています。外科医に診せましたところ、傷に包帯を巻いてくれて、遠からずすっかり良くなると請け合ってくれました。(三川 287)

2.3 終わりの挨拶

終わりの挨拶では、上の (3A)、(3B) で見たように、宗教的表現で相手を祝福し、キリスト教の暦にある聖人の日によって日付を表すことが一般的であった。当時イギリスではキリスト教が人々の生活に非常に浸透していたことがうかがわれる。(16)、(17)に類例を挙げる。その一方で、(18)のように月と日で日付を表す場合もあった。

- (16) マーガレット・パストン(第2世代・妻) ⇒ ジョン・パストン1世(第2世代・夫)

The blissyd Trynyté have zou in his kepyng and send zou helt and gode spede in al zowr materys. Wretyn at Sustede on þe Satyrday nexst after Seynt Valentynys day. (No. 131, ll. 115-17)

(The blessed Trinity have you in his keeping and send you health and good

speed in all your matters. Written at Sustead on the Saturday next after Saint Valentine's day.)

三位一体の神が貴方をお守りくださいますよう。そして、貴方に健康を送り、全ての貴方の物事に成功をもたらさんことを。サステッドにて聖ヴァレンティヌスの日(2月14日)のすぐ後の土曜日に記しました。(拙訳)

- (17) マーガレット・パストン(第2世代・妻) ⇒ ジョン・パストン1世(第2世代・夫)

Wretyn at Oxenede in ryth grete hast on Sent Mihyllys Evyn. (No. 126, l. 39)

(Written at Oxnead in right great haste on Saint Michael's Eve.)

オクスニードにて、聖ミカエルの晩(7月28日夜)にととても急いで記しました。(拙訳)

- (18) ウィリアム・パストン2世(第2世代・弟) ⇒ ジョン・パストン1世(第2世代・兄)

Gode haue 3ow in his kepeng. Wretyn at Norwyche þe secund day of May. (No. 89, ll. 47-48)

(God have you in his keeping. Written at Norwich the second day of May.)

神が貴方をお守りくださいますよう。5月2日にノリッジにて記しました。(拙訳)

3. ジャンル(嘆願書、覚書、遺書など)について

これまで、『パストン家書簡集』に収録された通常の手紙について、その構成に沿って特徴を示してきた。ここではさらに同書簡集に収録された嘆願書、覚書、遺書といった、通常の手紙とは異なったジャンルの文書の特徴的な例に着目する。

まず、ジョン・パストン1世による嘆願書(petition)である。彼は嘆願書を多く書いている(Davis版において彼が書いた文書44通中10通)。(19)は王であるヘンリ6世へのものである。ここでは、パストン家所有のグレシャムの荘園を、モーリンズ卿たちに不当に奪われそうになっていることを報告

している。ここでは、嘆願(“Besechith”)する内容まで述べられてはいない。引用文以降で、さらにモーリンズ卿とその家来たちが土地だけでなく財産を奪い、破壊行為をしたことを詳細に述べる非常に長い文が続く。その後ようやく、土地や財産が元に戻され、モーリンズ卿たちが罰せられるようにという嘆願の内容が述べられる。なお、嘆願書では、書き手は自分のことを、下線を引いたように3人称の代名詞 he (his, him) で受ける。

(19) ジョン・パストン1世(第2世代)の嘆願書 ⇒ ヘンリ6世(王)

Besechith mekly your homble liege man John Paston that, where he and oder enfeffed to his vse haue be pecybily poscessyd of the maner of Gresham within the Counté of Norffolk xx yere and more til the xvij day of Februarij the yere of your nobill regne xxvj, that Robert Hungerford, knyght, the Lord Molyns, entred in-to the seyde maner. (No. 36, ll. 3-7)

(Beseeches meekly your humble liege man John Paston that, where he and other enfeoffed to his use have been peacefully possessed of the manor of Gresham within the County of Norfolk 20 year and more till the 17 day of February the year of your noble reign 26, that Robert Hungerford, knight, the Lord Moleins, entered into the said manor.)

貴方の控えめで忠実な家臣であるジョン・パストン(1世)が従順に嘆願いたします。使うために封土を与えられた彼(ジョン・パストン1世)や他の人々が貴方の高貴な26年目の統治の2月17日まで、ノーフォーク州で20年以上の間平穏にグレシャムの荘園を所有していたのですが、モーリンズ卿のところの騎士であるロバート・ハンガーフォードがその土地に入り、所有を主張しました。(拙訳)

(20)はウィリアム・パストン2世によるフランス語文法に関する覚書(memorandum)である。この文書が書かれた1450年頃は、1066年のノルマン人によるイギリス征服以降公用語として使われていたフランス語がすでに廃れ、専ら英語が使われていた時期である。しかし、法律用語としてはいまだにフランス語が使われていたため、法律家である彼はフランス語を学ぶ必要があったと思われる。²¹ その他、覚えておくべき出来事、および今後す

べきことなどが示された覚書が収録されている。

(20) ウィリアム・パストン 2 世 (第 2 世代) の覚書

Frist, because it is not sownid as it is wretyn ze must considre þat this lettre s sondit neuer but qwan it stondit be-fore j of þis v letteris qweche ben callid wowellys, þat is to say a, e, i, o, v. (No. 82, ll. 4-6)

(First, because it is not sounded as it is written you must consider that this letter s sounds never but when it stands before one of these 5 letters which are called vowels, that is to say a, e, i, o, u.)

まず、書かれたようには発音されないので、貴方はこの文字、つまり s が a、e、i、o、u といった母音と呼ばれるこれら 5 つの文字の内の 1 つの前に来るとき以外は発音されないということを考えねばならない。

(拙訳)

(21) はマーガレット・パストンによる遺書である。書き出しで、まず自分がどのような人であるかを詳しく述べて、日付も正確に示している。その後、自分をどのように祀ってほしいか、また、財産をどのように分与したいかなどを詳細に述べている。彼女の遺書は、収録された文書の中でも非常に長いものである (Davis 版で 228 行、約 2800 語)。

(21) マーガレット・パストン (第 2 世代) の遺書

In the name of God, amen. I, Margaret Paston, widowe, late the wiff of John Paston, squier, doughter and heire to John Mauteby, squier, hole of spirit and mynde, with parfite avisement and good deliberacion, the iijte day of February in the yer of our Lord God a ml ccclxxxj, make my testament and last wille in this fourme folowyng. (No. 230, ll. 1-5)

(In the name of God, amen. I, Margaret Paston, widow, lately the wife of John Paston, esquire, daughter and heir to John Mauteby, squire, whole of [= of sound]* spirit and mind, with perfect advisement and good deliberation, the fourth day of February in the year of our Lord God of 1481, make my testament and last will in this form following.) (*whole of = of sound)

神の名のもとに、アーメン。大地主ジョン・パストンの最近までの妻であり、未亡人である、また、大地主ジョン・モートビーの娘であり相続人である私、マーガレット・パストンは、健全な精神状態で、完全なる助言と素晴らしい慎重さを持って、私たちの主人である神の1481年目の年の2月の4番目の日に次のような形で私の遺書と最後の望みを作成いたします。(拙訳)

4. まとめ

以上、始めの挨拶、内容、終わりの挨拶という順番で各部分について説明することにより、15世紀を代表する書簡集である『パストン家書簡集』に収録された手紙の特徴の一端を示した。

始めの挨拶の部分では、相手との関係に応じて、また手紙の内容に応じて、様々なバリエーションがあることを示した。また、内容の部分では、土地所有に関する報告から日用品の要求まで、色々な内容が詰め込まれていることを示した。中でも、土地所有権争いに関する内容がパストン家にとって最も重要であった。そして、終わりの挨拶の部分では、聖人の祝日や宗教上の祝日で月日を表し、キリスト教が日常生活に非常に浸透していたことを示した。その他、本書簡集に収録された手紙以外の特徴的な文書も紹介した。

ここで、日頃私たちが書く手紙について考える。形式としては、礼状など始めや終わりの挨拶のあるものから、挨拶を簡単にしたもの、さらにはおしゃべりをする感覚で友人に打つeメールまで様々なものがある。そして送る相手との関係や、書く内容によって手紙の形式を変化させる。したがって、手紙の中には、使用される語彙により日常の様子が表れるだけでなく、丁寧さの度合いにより社会において他人とどのように関わろうとしているかも表れるのである。

このように考えると、約500～600年前の多くの手紙をまとめた形で残している15世紀の『パストン家書簡集』は、当時の人々の日常の様子や社会生活を言語から知ることができる貴重な資料であり、その価値は高いと言えるだろう。本稿では、その価値の一部を明らかにできたと考える。

補記

本稿は、2012年度尾道市立大学芸術文化学部日本文学科、第10回「文学談話会」(2013年1月10日開催)の内容を加筆修正したものです。談話会では、まず私の研究対象である『パストン家書簡集』について説明した後で、実際に受講された方々に一通の手紙を読む活動をしていただきました(添付資料参照)。

謝辞

本稿執筆にあたり、画像掲載の許可を頂いた創元社、および英国図書館写本部に心より感謝申し上げます。

注

- 1 ジェントリー (gentry) とは、三川 39 頁によると、当時の「紳士階級、すなわち騎士や地方の地主たちが構成する、都会の商人と社会的に同レベルの地位」のことである。
- 2 社本 13 頁を参照。
- 3 中尾 7 頁を参照。
- 4 社本 22 頁を参照。
- 5 三川 21-23 頁によると、当時は召使や使用人が主に手紙を届ける役目を果たしていたことが述べられている。また、星名 22 頁によると、「近代郵便制度樹立のための基礎」である王室駅遞がイギリスにおいて民間人に正式に公開されたのは 1635 年である。
- 6 三川 21 頁を参照。ここでは、紙の原料や手紙を書く際の紙の使われ方が説明されている。
- 7 社本 16 頁を参照。
- 8 同書 14-15 頁を参照。ここでは、より小規模であるが、その他にも 15 世紀の貴重な文書として、1470 年代から 1480 年代の間に交わされたロンドンの商人の『セリー家文書』、およびオクスフォードシャーの『ストナー家書簡集』があることも指摘されている。
- 9 括弧内には Norman Davis 編集版テキストの手紙番号と行数を示す。以下同様。

- 10 社本 51 頁を参照。
- 11 宇賀治 59-60 頁を参照。ここでは、ウィリアム・キヤクストンが 1476 年にロンドンのウェストミンスターに印刷所を開設したこと、および、このような印刷術の導入が綴り字の固定に大きな役割を果たしたことが述べられている。また、現代同様の綴り法がほぼ確立したのは 1650 年頃であることも指摘されている。
- 12 *OED s. v. recommend v.*¹ *obs. 2. refl. and absol. To commend (oneself) to the kindly remembrance or regard of another. (Used in letters.).*
- 13 三川 24-25 頁を参照。
- 14 *OED s. v. default n. 1. a. Absence (of something wanted) obs. or arch.*
- 15 三川 17 頁を参照。
- 16 同書 17 頁を参照。
- 17 社本 160 頁を参照。
- 18 同書 92-95 頁を参照。
- 19 三川 12 頁では、これらの単位を「パストン家の人々はなんの苦労もなく」使い分けていたことが指摘されている。
- 20 同書 282-87 頁を参照。
- 21 郡司・岡田 63 頁、注 1 では、フランス語は「1731 年ついに廃止されるまで法律用語としてとどまっていた」と指摘されている。

添付資料

活動：手紙を一つ読む

ここでは、手紙の構成に注意して、妻マーガレット・パストンから夫ジョン・パストン1世への手紙を受講者に設問を解きながら読んでいただき、その後、日本語訳を配って設問の答え合わせをした。なお、綴りは現代英語綴りに直し、必要に応じて文章中、および文章の後に語彙の注釈を付した。

マーガレット・パストン(第2世代・妻) ⇒ ジョン・パストン1世(第2世代・夫)

TO JOHN PASTON I

1444, (day) (month)

To my right worshipful husband John Paston.

Right reverent and worshipful husband, I recommend [= commend] me [= myself] to you, desiring heartily to hear of your welfare, thanking you for your letter and for the things that you sent me therewith. And touching John Estegate, he come neither nor sent hither not yet, wherefore I suppose I must borrow money in short time but if [= unless]* ye come soon home, for I suppose I shall not have of [= from] him. So God help me, I have but [= only] 4 shilling, and I have (borrowed)** nearer as much money as comes to the aforesaid sum.

I have do your errands to my mother and my uncle, and as for the feoffs of Stokesby my uncle says that there be [= is] no more than he wrote to you of that he knows. (中略)

I pray you that you will vouchsafe to buy for me such lace as I send you example of in this letter, and one piece of black lace. As for caps that you sent me for the children, they be [= are] too little for them. I pray you buy them finer caps and larger than those were. Also I pray you that you will vouchsafe to recommend [= commend] me [= myself] to my father and my mother, and tell them that all their children be [= are] in good health, blessed by God. (中略)

The Holy Trinity have you in his keeping and send you health. Written at Geldeston on the Wednesday next after Sent Thomas.

By yours, M. Paston

(No. 127, ll. 1-10, ll. 17-22, ll. 30-32) (*but if = unless. ** 内容に従い筆者が追加)

reverent : 敬虔な worshipful : 敬虔な、敬うべき welfare : 幸福、繁栄
therewith : それとともに touching ~ : ~に関して hither : こちらへ
wherefore : それゆえ suppose ~ : ~と思う borrow : 借りる
in short time : 近々 aforesaid : 先ほどの sum : 総額 errand : お使い
as for ~ : ~について feoff : 封土、(封建制度下の) 領地
pray : 懇願する vouchsafe to ~ : 親切にも~して下さる
lace : レース (布地) example : 見本 finer : より立派な (比較級)
blessed by God : 神の恩恵を受けて The Holy Trinity : 三位一体の神
Sent Thomas : 聖トマスの祝日 (7月3日)

問1 : 始めの挨拶は簡単なものですか、それとも丁寧なものですか。

問2 : マーガレット・パストンは、所持金についてどのように報告していますか。

問3 : マーガレット・パストンは、ジョン・パストン1世に何を買ってほしいと言っていますか (2種)。

問4 : この手紙は何月の何曜日どこで書かれたものですか。

日本語訳

1444年7月8日

まことに尊敬すべき夫であるジョン・パストンへ

(問1) 心から尊敬し、お慕いする貴方に御挨拶申し上げます。ご無事にお暮らしであることを心から願い、お手紙とそれに添えてお贈りくださった御品の御礼を申し上げます。ジョン・エステゲイトのことでございますが、彼は家にも参りませんし、まだ何もよこしません。(問2) 貴方がすぐに帰宅してくださらなければ、近々借金しなければならぬことになると思います。というのも、彼からは何も得れないと予測するからです。神様、お助け下さい。私はたった四シリングしか持ち合わせていないのです。そして上記金額とほとんど同額に近いものを借りているのです。

私は私の母と叔父に対する貴方のお使いをいたしました。そして、ストックスピーの封土についてですが、私の叔父は彼が貴方に書いてお知らせしたものの他に彼が知っているものはないと言っています。(中略)

お願いがあります。(問3) この手紙の中に見本を入れて送りますが、このような黒いレースの布を私のためにお買い求めいただけたらありがたいのですが。子供たちのために送って下さった帽子は、彼らには小さすぎます。(問3) 子供たちにもっと上質の帽子、そして前のものよりも大きいのを買って下さるようお願いいたします。お父様とお母様に私からよろしく申していたとお伝え下さいませ。神様の庇護により子どもたちは全員健康に過ごしていると知らせていただけたら幸いです。(中略)

三位一体の神が貴方をお守りくださり、そして貴方に健康をお送りになりますよう。(問4) ゲルデストーンにて聖トマスの祝日のすぐ後の水曜日(7月8日)に記します。

貴方のマーガレット・パストンより
(社本 104-5) (タイトル変更、第2段落および最後の段落は拙訳)

(問の答(関連部分を下線で示した。) 問1:丁寧なもの、問2:少ない(または、借金しないといけない、既に借金している、4シリングしかない)、問3:黒いレース、子供たちの帽子(より上等で、大きいサイズのもの)、問4:7月、水曜日、ゲルデストーン)

テキスト

Davis, Norman. (ed.). 1971, 1976. *Paston Letters and Papers of the Fifteenth Century*. 2 vols. London: Oxford University Press.

参考文献

Gies, Frances and Joseph Gies. 1998. *A Medieval Family: The Pastons of Fifteenth-Century England*. New York: Harper Collins Publishers.

郡司利男、岡田尚(訳). 1963. 『英語史概説』(Fernand Mossé. 1958. *Esquisse d'une histoire de la langue anglaise*) 東京: 開文社.

星名定雄. 1990. 『郵便と切手の社会史〈ペニー・ブラック物語〉』東京: 法政大学出版局.

神保のぞみ(訳). 2006. 『図説キリスト教聖人文化事典』(Malcolm Day. 2001. *A Treasury of Saints: 100 Saints: Their Lives and Times*) 東京: 原書房.

Kurath, Hans, Sherman M. Kuhn & Robert E. Lewis (eds.). 1952-2001. *Middle*

English Dictionary. Ann Arbor: University of Michigan Press.

三川基好 (訳). 2001. 『中世の家族 — パストン家書簡集で読む乱世イギリスの暮らし』 (Frances Gies and Joseph Gies. 1998. *A Medieval Family: The Pastons of Fifteenth-Century England*) 東京: 朝日新聞社.

中尾俊夫. 1972. 『英語史Ⅱ』 (英語学体系 9) 東京: 大修館.

社本時子. 1999. 『中世イギリスに生きたパストン家の女性たち — 同家書簡集から』 大阪: 創元社.

Simpson, John. A. and Edmund S. C. Weiner (eds.). 2004. *The Oxford English Dictionary (OED)* 2nd ed. CD-ROM Version 4.0. Oxford: Oxford University Press.

宇賀治正朋. 2000. 『英語史』 (現代の英語学シリーズ < 第 8 巻 >) 東京: 開拓社.

著作権の関係上、図1、写真1、写真2、図2、写真3は、掲載できません。本稿の図、写真を含む全文を掲載した『尾道文学談話会会報』第4号を希望される方は、下記にお知らせ下さい。残部のあるかぎり、無償でおわけします。(送料着払い)

〒722-8506

尾道市久山田町 1600 番地 2

尾道市立大学芸術文化学部

日本文学科研究室